ベーデン-パウエル来る

高輪（たかなわ） 真澄（まさずみ）（東京・大田第四団ビーバー隊長）

一片の新聞記事から

平成三年の秋、ウッドバッジ実修所ビーバー課程の奉仕実績訓練に取り組んでいる最中のことでした。私は今まで気にかかっていたことを自己研修として研究していこうと考えていました。それはベーデン-パウエル卿の来日に関することです。

学生時代、『時事新報』という新聞を明治三十四年のものから昭和初期のものまで全て に目を通す機会がありました。このとき、確かB-Pに関するものがあった気がして、ずっと心に引っ掛かっていたのです。

世界旅行の途次、B-Pが来日したのは一九一二年（明治四十五年）四月二日のこと。大学図書館や資料館などで調べていくと、思いもよらず多くの新聞にB-P来日に関する記事が掲載されていることに驚かされました。今回、調査した新聞は『時事新報』など十七紙。その内、B-Pに関する記事があったのは十二紙に及びます。

従来の研究ではB-Pの日記から日本をどう感じていたかが中心に叙述され、彼の来日が日本社会にどのような影響を与えたかが、すっぽり抜けているように思えます。この点について当時の新聞記事を紹介しながら、考察していきたいと思います。

（新聞記事についての表記は一部、現代のものに改めてあります）

"THE JAPAN GAZETTE" April 2nd, 1912の記事

来日当日、日本のマスコミはどのような反応を示したか？

●少年義勇隊長来る

△横浜義勇少年出迎う

二日午後七時横浜入港のミネソタ号には萬国少年義勇隊の創設者英人サー、バーデン、ポーウエル中将が乗込んでいた。是より先横浜少年義勇隊員十八名はカーキー色の上衣に紺のズボンを穿ち同じ服装のグリッピン氏に率いられ一艘のランチに乗って中将を迎えるべく岸壁を離れた。

△満月の月色

折柄ミネソタは其巨体を徐々と港内に運び第二区に錨を投げるや歓迎の少年隊は日英米の三国旗にて満艦飾を施した本船に上った。時に満月は遙に暗き水平線上に現われ金波銀波激艶として春の海は悉く月色に満たされた。やがて中将は鳥打帽子に背広という軽快な服装で甲板上に現われ、中将の来訪を衷心より喜ぶ旨のグリッピン氏の歓迎の辞に対し、ポーウエル氏また短き挨拶をされ、少年隊は一足先に、中将は其後より会社のランチで上陸し、一応横浜市内見物して、再び船に帰った。

読売新聞（明治45年4月3日）の記事

△中将の旅程

中将は本年一月五日故国を出発して渡米し、それより加奈陀〈カナダ〉を経て二月十七日シヤトルよりミネソタ号に乗り初めて日本に来遊した次第で三日正午より横浜ユーナイテッドクラブに催さるる在留英人の歓迎会に望み午後より上京し東京日光等を見物して滞在五日の後馬尼剌〈マニラ〉、濠州〈オーストラリア〉、新西蘭〈ニュージーランド〉、南米〈実は南アフリカ〉等を経て帰国する予定である。

△乃木将軍と義勇軍

少年義勇隊は昔から欧州にあったが五年前中将が初めてこれを組織してから世界各国に拡まり、其目的は日本の武士道の如く精神を鍛練し義勇の気を鼓吹し人格ある第二の国民を作るにあって昨年英国皇帝戴冠式の行われた際其分列式に乃木東郷の両将軍が望み殊に乃木将軍が彼らを嘆賞した演説は深く英国少年の記憶に泌み込んで忘れ得ざる処であるそうな。目下少年義勇隊は英に二十万米に四十万を算し其他佛独露伊を初め世界十数ケ国にて百万余人もあり各国の少年隊は通信して親交を計りつつあるが、本年七八月頃には三十名の米国少年義勇隊は渡英して一層親交を計る筈である。

（以上『読売新聞』明治四十五年四月三日刊、慶應義塾図書館蔵／〈〉内は筆者の註）

また日本人が作る英字新聞の"The Japan Times"もほぼ同じ内容を伝えています。

ボーイスカウトのつかの間の旅

ベーデン-パウエル中将は矢のように素早い訪問をして急いでオーストラリアへ。武士道が普及している日本ならボーイスカウト運動はいらないと語った。

イギリスボーイスカウトの創設者のベーデン-パウエル陸軍中将は 昨日午後六時三十分、グレート・ノーザン汽船のミネソタ号で横浜に到着した。グリフィン隊長率いる十八名の横浜のスカウトはランチに乗り出迎えた。B-Pはミネソタに乗ってきたスカウトたちに心からの感謝を表した。

ジャパンタイムズの記者のインタビューに対し、B-Pはすべての階級の人々に、武士道精神が浸透している日本においては、特別なボーイスカウトは必要ない。ボーイスカウトの組織の方針や目的は日本における武士道と同じように、精神を鼓舞するのである。アメリカでは現在約四十万のスカウトが、イギリスには二十万のスカウトがいる。将軍はこの組織を世界中に広げていくつもりだ。

またこの六月には三十人のアメリカのスカウトがイギリスを訪れ特別の訓練を受ける予定だとB-Pは語った。

BＩＰの滞在はわずか五日間で、決まった行事は予定されていない。本日彼は横浜ユナイテッドクラブにゲストとして呼ばれ、二時三十分の急行で東京に向かう予定だ。彼は東京から神戸へ行き、そこからオーストラリア、ニュージーランドそして南アフリカへ向かう予定だ。彼はわずかな滞在のため、Noel Van Raalke Eric R. Insole, M. C. Wroughton を伴っている。また彼は乃木将軍に会えないことをたいへん残念に思っている。
（"The Japan Times" April 3rd, 1912　慶應義塾図書館蔵）

この他、『朝日新聞』『東京日日新聞』（毎日新聞の前身）、『横浜貿易新聞』（神奈川新聞の前身）、『萬朝報』にもほぼ同じ内容の記事が掲載されています。

これだけ多くの新聞がＢＩＰを出迎え、記事にしたということは私にとってたいへんな驚きでした。そればかりか記者たちはＢＩＰを単にマフェキングの英雄である将軍としてではなく、世界のボーイスカウト運動の創設者として迎えていたのです。

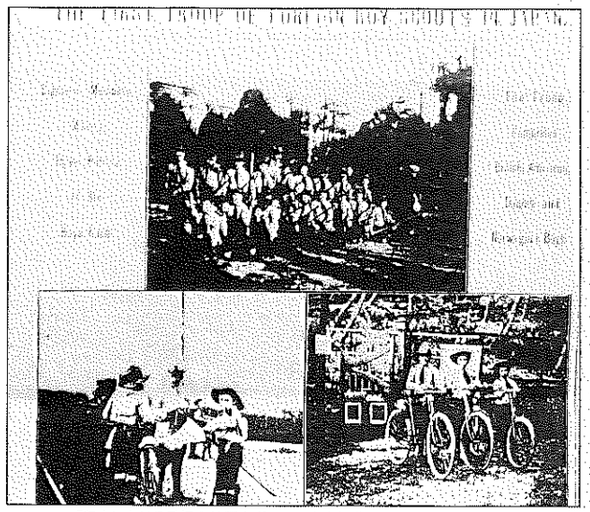
この意味でＢＩＰの来日はボーイスカウト運動を広く日本社会に知らせる第一歩となったと位置づけることができるでしょう。

横浜のボーイスカウト

ＢＩＰを出迎えたボーイスカウトは「日本ボーイスカウト運動史」（以下、「運動史」と略する）によると、イギリス人Ｃ・グリフィンによって前年十二月二日（横浜で発刊されていた英字新聞〝THE JAPAN GAZETTE〟（横浜開港資料館蔵）の記事では一九一二年二月となっている）に組織されたものです。彼らの構成はイギリス人十二人、アメリカ人三人、デンマーク人二人、ノルウェー人一人の合計十八人となっていますが、スカウト出迎えについての記事を見ると、その数が十八人（三紙）だったり十五人（『朝日新聞』など二紙）だったりしています。

「運動史」の中にはジャック・キングなるスカウトが病気のため歓迎に参加できなかったこと、そのジャックをＢＩＰが見舞ったという話が掲載されていますが、記事に書かれた人数の差が歓迎の場に不在のスカウトがいたというこの逸話を裏付けていると思われます。

なお"THE JAPAN GAZETTE"はＢＩＰの来日を二日から大きく報道し、三日は横浜のスカウトについても写真と名前入りで掲載しています。



「日本における最初の外国人ボーイスカウト隊」。"THE JAPAN GAZETTE"（April 3rd.1912）の記事。（横浜開港資料館蔵）

最初の日本人スカウト

もう一つ注目されるのは同じく〝GAZETTE〟の"THE FIRST TROOP OF JAPANESE BOY SCOUT〟と題した写真です。この説明には「この小さな隊は一九一一年あるイギリス人によって横浜で組織されたが、この紳士は後に東京に移ったため隊は解散した」と記されています。すなわち一九一一年にイギリス人によって日本人のボーイスカウトが組織されていたことになります。

写真を見るとどう見ても日本人で、この八名の日本人は日本人ボーイスカウトの第一号ということになり、日本のボーイスカウトの歴史に新たな一ページが加わったことになります。

（次号では英国協会でのＢＩＰのスピーチについて報告します）

「最初の日本人ボーイスカウト」。"THE JAPAN GAZETTE"（April 3rd.1912）の記事。（横浜開港資料館蔵）

インターナショナルスカウティング

——ワールドスカウティングニューズ（世界スカウト機構機関紙より）——

アラブ地域で「スカウティングにおける成人会員」を検討

今年一月二十五日、アラブ地域の十のスカウト連盟の指導的立場にある、チーフコミッショナー、ナショナルトレーディングコミッショナー等の主要役員が、エジプトのカイロ国際スカウトセンターに会し、「スカウティングにおける成人会員」について考えるセミナーに参加した。

このセミナーは、七月にタイ・バンコクで開かれた第33回世界スカウト会議を睨んで行われたもので、参加者たちは、成人の人材管理に関するグローバルな方針案について、あらゆる角度から詳細な検討を行った。この方針案は、世界会議で是非が問われる予定になっており、これが採択されれば、世界中どこでも、常に訓練を積んだ十分な数の成人指導者のもとでスカウト運動を展開することが可能になる。

この方針案のなかで、特にセミナー参加者が重視したのは人材開発の項目であり、成人にスカウト活動への参加を促すうえで、この点が大切な要素となることが指摘された。さらに、この方針を実行するために、現在活動中の多くの指導者は、スカウト活動における成人の役割と立場に対する考えを改め、頭を切り替える必要があることも強調された。

なおこのセミナーは、アラブ地域スカウト事務局のファウジ・ファーガリ事務局長、並びに世界スカウト事務局訓練部長フィリップ・ピジョレの共催によるものである。

成人の人材管理についてグループディスカッションを行うモロッコ、リビア、エジプト、サウジアラビア、レバノンの各代表者

ハンセン病のない学校作りを目指すインド連盟

インド連盟が推進している運動の中で、最も大きな成果を上げているものの一つに、ハンセン病のない学校作りを目指した計画がある。この計画は、連盟が行っているハンセン病知識普及・予防運動の一環として進められているものである。

インド全土で行われているこの計画では、スカウト、ガイド、そしてリーダーが都市部、地方部双方の学校を訪問し、子どもたちを診断してハンセン病の発症の有無を確かめるとともに、この病気についての知識の普及に努めている。この計画に携わっている者は、いずれも現地に赴く前にトレーニングを受けた医療及びその関係分野の専門家たちである。

計画の対象となっている学校の中には、非常に交通の不便な地域に位置しているものもあり、自転車や、道路状態によっては牛車を利用しなければ行き着けないこともある。学校の往復にスカウトとガールガイドのメンバーが、一日二十キロ以上も自転車をこがなくてはならないこともしばしばである。

連盟では、劇や人形劇、ポスター、パンフレット、講演、映画などを通して「ハンセン病は呪いによるものではない」という理解を広め、この病気の性質と初期症状についての知識の普及を図っている。

なおこの計画には、地元地域、教師、ならびに地元のハンセン病担当職員から全面的な協力が寄せられている。

ベーデン-パウエル来る

高輪 真澄（東京・大田第4団ビーバー隊長）

ベーデン-パウエル卿、大いに語る

一九一二年（明治四十五年）四月二日、ベーデン-パウエル卿は横浜に到着しました。そして翌三日、彼は横浜ユナイテッドクラブ（Y・Uクラブ）で開かれた英国協会主催の昼食会に招待され、スピーチをしています。

ボーイスカウト運動を世界中に広めるために行った今回の旅行で、B-Pは世界各地で講演をしました。しかし、日本ではこれ一回だけなので、来日の意味やB-Pの考えを知る上で、たいへん重要と思われます。今回、ここでその全文を紹介いたします。

なお、この記事は横浜で発行されていた英字新聞"THE JAPAN GAZETTE"（April 3rd,1912）、"The Japan Weekly Mail"（April 13th,1912）および神戸で発行されている"The Japan Weekly Chronicle"（April 11th,1912）〔以上、横浜開港資料館所蔵〕に掲載されています。今回は"The Japan Weekly Mail"を多くの方の協力のもとに和訳してみました。

階級の存在や大英帝国の領土など、当時のイギリスの状況を頭に入れて読んでいただければと思います。

"THE JAPAN GAZETTE"（April 2nd. 1912）。

B-Pのスピーチ

旅先でボーイスカウト運動を見た

会長そして紳士諸君、私を招待し親愛の情を持って迎えていただいたことに対し、心から感謝申し上げます。

なぜなら私は皆様方にこんなに注目されているなどとは思っていなかったからです。今回私は本当の旅行の目的とは別に日本へやってきました。私は単に二、三日の間、日本の観光に来たのです。すなわち酒を飲み、芸者を見に。（笑い）

それゆえ、こんなにたくさんの友人の輪に入って、多少私は驚きを感じつつも満足しています。実際、ボーイスカウト説明のための世界旅行のおかげで、私はいろいろな国に行くことができるのです。実にうれしい旅行です。

そして私が訪れた世界のいたるところで、ボーイスカウト運動が発展していることが一番うれしいのです。私は西インドそしてアメリカを経て、ここにやってきました。私はどこへ行ってもボーイスカウトの隊を見ました。その内、少なくとも三つは今まで私が耳にしたことがありませんでした。パナマでも九つの隊があるのを知りました。以前は耳にもしていませんでしたが。

そして昨日、私は着飾った若い軍人に迎えられました。私も知らない内にたった数日前、結成されたばかりという隊を彼は率いていました。

それに私は上海から招待されています。そこでは、ふたつの大きな団が組織されています。そしてマニラでも私はもっと多くの団を見ることでしょう。もちろんオーストラリアやニュージーランドでもこの組織はたいへん大きく広がっています。

これらの事実はこのボーイスカウト運動が小さな島から始まって、自然に世界中に広まっているのだということを示しているのです。それは自然な発展です。世界中で取り組まれ具体化され、そして広がっていくことでしょう。

朝日新聞での来日記事（明治45年4月4日刊）

少年たちを救うこと

私はこの運動は効果があるだろうと心から思っています。ボーイスカウト運動は最初に創設された場所、つまり産業中心地のスラム街では確かに効果をもたらしました。

スラムでは少年たちが泥沼にはまりこみ、人生におけるチャンスというものもなかったのです。これらの少年たちは「どんづまり」の仕事と呼ばれる仕事をさせられていました。そこでは使用者が少年たちの給料を吸い上げ、結局学ぶべきことなんか一つもなかったのです。あるいは人生にとって有益なことを何も知ることがなかったわけです。

雇用期間が終わったとき、彼らは役に立たなくなっていました。だから彼らは職を失ったというだけでなく、さらに悪いことに雇用価値のない人々の巨大な大群の中に入ってしまうのです。何でも屋になろうとしても無駄です。

私たちは遠い地まで赴き、そして同じ絶望の淵へ青年たちが落ちるのを防ぎたいのです。（拍手）

しかし同時にこの病気は一つの階級だけに止まらないのです。この病気はより高い階級の少年たちにも共通して見られます。彼らは他の少年と同じように簡単にこれにかかってしまうのです。ボーイスカウト運動はすべての少年たちに役に立つものなのです。

人は時々こう言います。「私たちにはボーイスカウトは必要ない」と。私は答えます。「もしあなたが必要ないのなら、それでもいいのです。あなたがそれを必要としているかどうかにかかわらず、少年たちはそれをつかみとることでしょう。」

ポイントは皆様方が少年たちに何を学んでもらいたいかということです。自己への責任感、もっと勇気を持つこと、もっと忍耐力を持つこと、自己への信頼感や臨機の才を持つこと。もし彼らがこの四つの壁の内面を学ぶことができたら、私は何も言うことはないのです。

少年がボーイスカウトになったとき、彼は自分自身のためにこれらを取り上げるでしょう。私たちはただ少年にやる気を与え、そして自分自身で学ぶ責任感を与えようとしているのです。

もし少年たちが高い気品を自分のために備えようとしなかったら、皆様方は彼らにこれを与えることはできないでしょう。どんな階級の少年でもボーイスカウトになることに障害はないのです。

少年は人生のために彼に備わっている男らしさという特質を選びとるでしょう。なぜなら、これらは自分のために学ぶものであり、人生の助けとなる特質が発揮される方法を作り上げていくものだからです。

兄弟

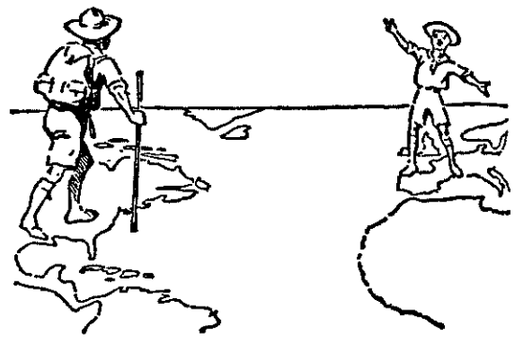
もう一つ、この運動について言いたいことがあります。それは多くの人たちに推奨され、そして大英帝国すべてに広がっているということです。

ボーイスカウトは偉大なる兄弟愛を持っています。国の違いを乗り越え、同じ名前で同じバッジをつけて、同じ目的のために働くのです。彼らは深遠な兄弟愛を作り

たがっています。私たちはそのお世話をしているのです。そしてお互いに手紙を交換し、相互に訪問することを勧めています。

昨年はカナダやオーストラリアの多くのスカウトがイギリスを訪問しました。そして近くはマルタ、ジブラルタル、他の海外植民地や自治領からも。私は明けくる年、大いにそれを推奨したいと思っています。また私は世界中の大英帝国のきずなを堅く結び付けることを助けていきたいと思います。(拍手)

私はこれで満足するような小さな心は持ち合わせていません。私たちはこれ以上に広げていくことができるのです。全世界はスカウティングの計画を受け入れています。



私はアメリカで二十一のスカウト運動のセンターを訪問しました。そこでは三十～四十万人のスカウトが活動していました。彼らは自分たちをイギリスのスカウトたちの兄弟だと考えています。そして手紙を送っています。彼らは今年、一つの隊をイギリスへ送り出しました。そして私たちは来年、これに応えていきたいと考えています。

ドイツには多くのボーイスカウトがいて、四つの団体がイギリスにやってきました。イギリス各地をまわり、そしてスカウト運動関係の知人を多く得ました。またイギリスのたくさんのスカウトたちが昨年オランダ・デンマーク・スウェーデンに行きました。

個々人の接触を奨励し、また世界諸国民が将来危機に瀕したときに貴重な奉仕をするであろう彼ら自身の内に団結の絆を形作っています。

そんなとき少年たちはお互いの立場の違いから発生する困難にぶつかることでしょう。もしこの運動が広がっていくなら、世界平和を押し進めようとする将来、相違が生じるに違いない彼らの間にも本当の意味での同情や正義感が広げられていくでしょう。(拍手)

皆様方は夢話とお思いかもしれません。しかし、もし皆様方が私の考えを理解してくれるのなら、細かく研究し、またいろいろな方法で少年たちを助けてあげていただきたいのです。

皆様方のできることはたくさんあります。たとえ、皆様方が彼らの背中をたたいて励ましてあげることしかできないにしても、また彼らに仕事を続けるよう告げることしかできないにしても。

皆様方の励ましは、少年たちの努力を明確にし、人生の助けとなり、少年たちを良い社会人にしていくことでしょう。イギリスの雇用局は少年たちのために作られました。そして人々は他の少年より、むしろこうした少年たちを雇おうとしています。なぜなら彼らを大人と同じくらい信頼できると見ているからなのです。そして、それは時々、大人以上の信頼でもあるのです。

皆様方にはこの運動の価値についてご理解いただけたことと思います。もし、皆様方が彼らをいろいろな方法で励ますことができるのなら、ぜひそうしていただきたいと希望いたします。(大拍手)

(講演文章中の小見出し並びに改行は本誌編集部でいたしました。)

Apr. 13, 1912.] THE JAPAN WEEKLY MAIL.

ENERAL BADEN-POWELL'S VISIT.

TIFFIN WITH THE BRITISH ASSOCIATION.

As already briefly reported, Lieut.-General Sir Robert Baden-Powell, K.C.B., K.C.V.O., arrived by the Gt. Northern steamer *Minnesota* on Tuesday evening last. The General spent the night on board the vessel, but received a visit immediately on arriving from the local troop of Boy Scouts, under the escort of Mr. Clarence Griffin, the Scoutmaster. The troop, which is made up of all nationalities, was very kindly received by Sir Robert, who chatted with them for some time.

The General landed on Wednesday morning and proceeded to the Y. U. Club, where he was entertained at tiffin by the members of the British Association, some eighty taking part.

Mr. V. R. Bowden, the Chairman of the Association, being in Kobe, Mr. George Miller, the Vice Chairman, presided.

An excellent repast was served, on the conclusion of which, Mr. Miller briefly called upon the members of the Association to drink to the health of the gallant General, whose eminent services to the Empire were within the minds of all. He was now devoting his time and energy to the Boy Scout movement, an organisation which was exercising an immense amount of good upon the growing manhood of the nation in encouraging those manly, honourable and noble qualities which go towards making useful and desirable citizens. He asked them to drink to the health of the General and the success and prosperity of the Boy Scouts.

The toast was enthusiastically drunk with musical honours, followed by three cheers and a "tiger."

In response, Sir Robert, who was again warmly applauded, made a bluff, soldierly speech. He said: Mr. Chairman and Gentlemen, I must offer you my most sincere thanks for the kind and generous way in which you have received me, because I must say I came to Japan rather out of my proper line of tour, not expecting to be noticed at all. I merely came to see something of Japan for two or three days—to drink your *sake* and see your *geisha*. (Laughter.) Therefore to find myself in the hands of so many kind friends has somewhat astonished me and given me great gratification. I thank you most cordially. The fact is that running round the world on account of the Boy Scouts has brought me to these parts, a very willing traveller, and I must say that it is a most gratifying thing to find of despond. (Applause.) But at the same time this disease is not limited to one class. The disease is also common among the better class of boys, who catch it as easily as others. The Boy Scout movement is for the benefit of all. People sometimes say," Oh, we don't want the Boy Scouts here." I reply "If you don't want it, don't have it. The boys will catch it whether you want it or not." The point is do you want your boys to learn to be self-responsible, to have more pluck, more endurance, more self reliance and resourcefulness? If they can learn all that inside of four walls I have nothing to say. When a boy becomes a scout he picks those things up for himself. We merely give him the ambition and put upon him the responsibility of teaching himself. You can't give boys a high moral tone if they won't pick it up for themselves. I don't think it does boys of any class any harm to become Boy Scouts. He does really pick up attributes of manliness which stick to him for life, as those things do which one learns for oneself, and forms means of developing his character which will help him to a career in after life. There is another thing about the movement which commends itself to many and that is that it has spread itself all through the British Empire. The Boy Scouts like to think of themselves as a great brotherhood, with no difference of country, all working for the same end under the same name and the same badge. They like to make it a secret brotherhood. We are fostering that and getting them to write to each other and interchange visits. Last year a great number of Canadian scouts visited England and there were also visits from Australia and nearer places like Malta, Gibraltar and the other over-sea Colonies and Dominions. We hope to promote that to a very great extent during the coming year and help to tighten up the bonds of Empire all over the world. (Applause.) I am not so small minded as not to see that we can extend it further than that. All foreign countries have adopted the scheme of scouting. In America I have been visiting twenty-one centres of the Scout movement, where between three and four hundred thousand scouts are in training. They look upon themselves as brothers of the British scouts, and are waiting to them. They are sending a troop over to England this year, and we hope to respond to it next year. In Germany there are many Boy Scouts, and four lots have been over to England and gone round the country and made the acquaintance of many connected with the movement. Lots of our Boys have also been in Holland, Denmark and Sweden during the past year. All are pro-

"The Japan Weekly Mail"(April 13th, 1912)の講演記事。

きみもぼくも名カメラマン!!

第21回 全国ボーイスカウト 写真コンテスト 作品募集

きみのまわりのシャッターチャンスを
すかさずフィルムに焼きつけよう。

応募のきまりを守って、
どんどん作品を送ってください。

第20回 少年の部・最優秀賞
「バランス」 仁井賀基(大阪)

(応募のきまり)

■テーマ/・「ボーイスカウト」をテーマに、どんな内容でも応募できます。
・スカウトはどんなテーマでも応募できます。

■部門/・少年の部 20歳未満の方ならどなたでも応募できます。
・成人の部 20歳以上の方ならどなたでも応募できます。

■応募方法/・テーマにそって、自由な写真をとってください。
・写真のうらに応募用紙をはって送ってください。

■作品のサイズ/カラー、モノクロとも、サービス判以上四つ切り以下
・パノラマサイズも可

■送り先・お問い合わせ/〒181 東京都三鷹市大沢4-11-10
㈶ボーイスカウト日本連盟「写真コンテスト」係
☎0422—31—5161(大代表)

■しめきり/平成6年2月28日(当日消印有効)

■審査委員/秋山庄太郎氏(写真家)およびボーイスカウト日本連盟審査委員

■発表/
月刊「スカウト」、「スカウティング」および「日本カメラ」誌上
ただし、入選者には直接通知します。

■応募上の注意/
応募作品は平成5年1月以降に撮影したコンテスト・印刷物などに未発表のもので、他に発表または使用予定のないものに限ります。
・原則として、応募作品はお返しいたしません。
・入賞作品は、ネガ(ポジ)フィルムの提出をお願いします。
・入賞作品の使用権は主催者に属します。
・応募作品は、入賞発表のほかに日本連盟機関誌に掲載することがあります。

(賞)
少年の部最優秀賞1点
賞状/副賞/富士フイルム賞/ボーイスカウト賞(盾)
優秀賞2点
賞状/副賞/富士フイルム賞
成人の部最優秀賞1点
賞状/副賞/富士フイルム賞/日本カメラ賞(盾)
優秀賞2点
賞状/副賞/富士フイルム賞
少年・成人の部入選者千数
賞状/副賞/富士フイルム賞

第21回 全国ボーイスカウト写真コンテスト応募用紙

表題			部門 (　　枚組) 少年・成人
氏名(ふりがな)	年齢 歳	性別 男・女	職業(学年)
住所 〒			
	電話番号 — —		
この作品について一言			
ボーイスカウトの方は 加盟員ナンバー	所属 第 団 隊		役務

応募用紙

点線で切りとって写真のうらにはってください。
応募用紙はコピーして使えます。
主催 財団法人ボーイスカウト日本連盟
協賛 富士写真フイルム株式会社
株式会社日本カメラ社
審査 秋山庄太郎氏(写真家)

新・微粒色 FUJICOLOR SUPER G400

新聞記事で探るB-Pの来日〈第3回〉

ベーデン-パウエル来る

高輪（たかなわ） 真澄（まさずみ）（東京・大田第四団ビーバー隊長）

ある社説記者が見たボーイスカウト――時事新報

明治四十五（一九一二）年四月六日、『時事新報』は「ボーイスカウト」と題する社説を掲載しました。いまだ日本で知られていないボーイスカウト運動が初めて大新聞の論説に取り上げられ、広く読まれていたという事実は特筆すべき事柄と言えるでしょう。

しかし、この『時事新報』は現在ではあまり知られていないかと思われますので、簡単に解説しておきましょう。

『時事新報』は明治十四年慶応義塾を創設した福沢諭吉によって創刊された日刊紙です。不偏不党、独立不覇の立場を唱えて注目され、福沢の名声にも支えられ、たちまち東京の最有力紙に発展しました。読者は東京のインテリ知識階級に多かったようです。当時は福沢諭吉の次男捨次郎が社長、主筆として石河幹明、板倉卓造らが中心となり、大正の前半期まで編集・経営の両面で日本の新聞界をリードし、特に強力な海外ニュース報道と豊富な広告で知られていました。（吉川弘文館『国史大辞典』より）

A DISTINGUISHED VISITOR TO JAPAN.

"THE JAPAN GAZETTE" April 2nd, 1912の記事

時事新報
ボーイスカウト
●四十年前の回想
影撮中 左端岡来行一侯爵 右端平十四

『時事新報』明治45年4月6日刊

社説　ボーイスカウト

英国に於けるボーイスカウトの創設者たる陸軍中将サア　ロバート　ベーゾンポーウエルは世界遊歴の途次過日来着し七日神戸より出発の筈なり。ボーイスカウトなるものは児童の間に自尊自信の念を鼓吹して男らしく且つ融通の利く人格を養成し如何なる境遇に遭逢するも自ら進退去就を判断して惑はざるの能力を得しむるを目的と為し其方法は全国を通じて児童の大団体を組織し之を地方団体及び六人乃至八人より成る小組合に分かち射撃、斥候、追跡、信号、応急救護、山野跋渉、野営等児童の嗜好に投ずる一方に非常の場合に用立つ可き事柄を練習せしめ其間に銘々の品性を鍛練するものにして然も是等の方法は画一的に行はず地方団体の自治に委せてそれぞれ選択の自由を許し居れり。而してボーイスカウトの創設せられたるは去る四十一年のことなるに爾来同国人一般の歓迎を受けて非常の盛況を呈し昨年までに二十萬人の児童を団体員たらしめ更に加奈陀、オーストラリア、ニュージーランドの各地にも同様の計画を生じ独逸、佛蘭西、諾威、西班牙等を始めとして諸外国にも之を倣うもの頗る多しと云う。蓋しベ氏が斯る計画を思付きたるは現在の普通教育のみにては英国人今後の相続人として適当なるを養成し難きを認め其以外に特殊の人格教育を施さんとするの趣意なる可し。又其計画が独り英国のみならず世界を通じて短時日間に長足の発達を為したるは国際の競争激甚にして何れの国にても次の年代に於ける自国の成功に掛念すること深きの余り其点に安心を求るには児童の人格教育に力を注ぐこそ現在の最急務なるを感じずるもの少なからざるが為めならん。ベーゾンポーウエル氏が早く此一事に着眼して率先計画を起こしたるは今より見れば亦軽からざる功績と云う可し。

此計画を其まま我国に用いて可なりや否やは未だ断言す可からずとも知識の注入のみに偏して人格の陶冶に欠くる所多きは我教育界の通弊にして近来学生の風儀甚だ宜しからずとの嘆声は主として此通弊に存すること疑を容れざれば其辺の事柄に注意する人々は近頃珍しき成功を遂げたるボーイスカウトの組織に就き篤と調査を遂げて可ならん。而して同じく人格の陶冶と云うも単に消極一遍の倫理教育のみに止まらず独立自尊の基礎の上に意志を強固ならしして勇往敢為の気象を盛たらしむるは今日の社会に最も大切なるに近時の少年学生中所謂堕落生なるものを別とするも兎角女々しく繊弱なる風に染むもの多く是等の輩が将来政治学問軍事商工業等に外国人と相角逐して少くも対等の地位を占め得るや否やを思うときは甚だ心細き感なきを得ず。而して封建時代の所謂武士道の如き往々曲解濫用せられ易きものを其儘応用す可からざるは勿論にして是非とも今日の世界に恰適せる新方法を打立てざる可からざる我輩は此点よりして特に世間の教育家にボーイスカウトの研究を推奨するものなり。（『時事新報』明治四十五年四月六日刊／慶応義塾図書館蔵）（社説記事中の句読点は編集部で付けました。）

この社説では、最初にB-Pの来日とボーイスカウト運動を紹介しています。次に世界にまたたく間に発展したこと、最後に日本にこれをどう導入するのかの提議を行っています。

ここで注目されるのは、まず呼称を「ボーイスカウト」としている点です。他紙は「少年義勇隊」とか「少年義勇軍」というように当時の一般社会に理解しやすいように漢字で訳していますが、ここでは世界的呼称としてか、また軍事的意味あいを薄める目的かカタカナ表記を行っているのです。

また後半で日本の現状を踏まえ武士道についても言及しボーイスカウトの研究を推奨している点など、特に画期的な記事だと言えるでしょう。

この記事を読み、ボーイスカウト運動の研究に入った人は数多くいたのではないでしょうか。東京にボーイスカウトが結成されたのは翌大正二年のことでした…

きみもぼくも名カメラマン!!

第21回 全国ボーイスカウト 写真コンテスト 作品募集

きみのまわりのシャッターチャンスを
すかさずフィルムに焼きつけよう。

応募のきまりを守って、
どんどん作品を送ってください。

(応募のきまり)

■テーマ／・「ボーイスカウト」をテーマに、どんな内容でも応募できます。
・スカウトはどんなテーマでも応募できます。

■部　門／・少年の部　20歳未満の方ならどなたでも応募できます。
・成人の部　20歳以上の方ならどなたでも応募できます。

■応募方法／・テーマにそって、自由な写真をとってください。
・写真のうらに応募用紙をはって送ってください。

■作品のサイズ／カラー、モノクロとも、サービス判以上四つ切り以下
・パノラマサイズも可

■送り先・お問い合わせ／〒181 東京都三鷹市大沢4-11-10
㈶ボーイスカウト日本連盟「写真コンテスト」係
☎0422—31—5161(大代表)

■しめきり／平成6年2月28日（当日消印有効）

■審査委員／秋山庄太郎氏(写真家)およびボーイスカウト日本連盟審査委員

■発　表／
月刊「スカウト」、「スカウティング」および「日本カメラ」誌上
ただし、入選者には直接通知します。

■応募上の注意／
応募作品は平成5年1月以降に撮影したコンテスト・印刷物などに未発表のもので、他に発表または使用予定のないものに限ります。
・原則として、応募作品はお返しいたしません。
・入賞作品は、ネガ(ポジ)フィルムの提出をお願いします。
・入賞作品の使用権は主催者に属します。
・応募作品は、入賞発表のほかに日本連盟機関誌に掲載することがあります。

少年の部 最優秀賞
SONY
特定小電力トランシーバー
「ICB-U700 U-CEIVER」(2台)

成人の部 最優秀賞
エコテント(フライシート付・4〜5人用)

(賞)
少年の部最優秀賞1点
賞状／副賞／富士フイルム賞／ボーイスカウト賞（盾）
優秀賞2点
賞状／副賞／富士フイルム賞
成人の部最優秀賞1点
賞状／副賞／富士フイルム賞／日本カメラ賞（盾）
優秀賞2点
賞状／副賞／富士フイルム賞
少年・成人の部入選若干数
賞状／副賞／富士フイルム賞

第21回 全国ボーイスカウト写真コンテスト応募用紙

表題			部門 (　　枚組) 少年・成人
氏名（ふりがな）	年齢 歳	性別 男・女	職業（学年）
住所　〒			
	電話番号 ―　―		
この作品について一言			
ボーイスカウトの方は 加盟員ナンバー	所属 第　団　隊		役務

応募用紙

点線で切りとって写真のうらにはってください。
応募用紙はコピーして使えます。

主催　財団法人ボーイスカウト日本連盟
協賛　富士写真フイルム株式会社
　　株式会社日本カメラ社
　　ソニー株式会社
審査　秋山庄太郎氏(写真家)

新・微粒色
FUJICOLOR SUPER G400

社説の筆者は誰か?

昨年、私はこの社説を書いた人が分かればと感じつつ、慶応義塾福沢諭吉研究センターに足を運びました。そこで私の願いがかなったことは思いがけないことだったのですが。

同センター所蔵の「時事新報　社説日表七」によると、この社説は「安岡秀夫」という社説記者によって書かれたとのこと。そこでもっと調べていくと『慶応義塾出身者名流列伝』（明治四十二年、実業之世界社）という書物に彼のことが出ていました。彼のことをここで紹介しておきます。

時事新報が我が國第一の新聞たるは論なし、固よりも、其記事の穩健にして、大新聞の態度の充分な

（安岡秀夫『慶應義塾出身者名流列伝』（実業之世界社）より）

安岡　秀夫／明治六年生まれ、衆議院議員安岡雄吉の弟、十七歳で小石川同人社に入学、のち慶応義塾大学文科三期に入る。明治二十四年退学し、二十六年時事新報社に入社。三十六年から社説記者となった。専門は外交関係で主筆の石河幹明の補佐をしていたという。

専門の外交関係からボーイスカウト運動の発展を知り、日本の中に広く知らそうとして、このような社説を書いたのではないでしょうか。

横浜を離れて

BーPは三日午後の昼食会を終えると、すぐ横浜を発ち東京に向かいました。以降を新聞記事で追ってみます。

◎パ中将の入京
▼直に日光見物

二日午後六時大北汽船会社のミネソタ号にて横浜に到着せる世界少年義勇隊総司令官パウエル中将は三日午前九時上陸し山下町ユーナイテットクラブにて横浜少年義勇隊員の検閲を行い英国人協会主催の午餐会に臨み一場の演説を試みたる後午後四時二十分一行四名横浜発汽車にて入京せり。停車場にて数名の少年義勇隊員の出迎えを受けたる後二台の自動車に分乗して雨中を直に上野停車場に着午後四時二分上野発の汽車にて日光に向へり。三日午後八時四十分日光に着せるパウエル中将は同夜金谷ホテルに投宿し四日は見物のために費消し五日午前九時十分の列車にて帰京の途に就く可しと云ふ。

（『朝日新聞』明治四十五年四月五日刊）

（記事中の句点は編集部で付けました。）

横浜を出発した時間は、他紙によると二時二十分の誤りではと思われます。こうしてBーPは東海道線で新橋に到着し、上野まで車で行き、そこから東武線で日光に向かいました。詳しいことは日記（『ベーデンーパウエル伝』百八十四ページ）にのっています。日光では金谷ホテルに宿泊しているようです。

以降の記事は東京の新聞にはあまり出てきません。そこで次回は大阪の新聞からBーPの行動を探っていきます。

ベーデン-パウエル来る

高輪 真澄（東京・大田第4団ビーバー隊長）

西へ向かう――大阪では一面トップに

ベーデン・パウエル卿は明治四十五年四月五日、東京を発ち夜行列車で京都に向かいました。

六日の『大阪朝日新聞』は一面のトップ項目として「英国少年斥候隊」と題する記事と写真を掲載しました。少年斥候隊とは言うまでもなくボーイスカウトの直訳です。

まずこの記事から紹介いたします。

英国少年斥候隊

英国陸軍中将バーデン、パウエル氏は今回我が邦に来遊し、近日京阪地方を通過すべしという、吾人は南阿戦争に於ける中将の偉勲を追懐し、此の勇敢なる一武人に対して深厚なる敬意を表すると共に、中将が英国少年斥候隊の創立者たるに対し、恭敬の念一層の深きを覚ゆる者なり、少年斥候隊とは、英国各階級の少年に円満なる心身の発達を促し、以て善良なる人士を養成せんとする組織的教育義勇団にして一九〇八年始めて英国に起り、爾来顕著なる進歩を呈し、今日にては欧米諸国に於て有力なる教育機関たるに至れり、其の教訓とする所は、神に敬虔にして忠孝を尊び、他人を愛し公益を重んじ、勤勉節約快活敏捷を旨とし、其の他普通教育の要義を包含するの外、格別の異色なく、其の修業年限も亦短日月に過ぎずと雖も教育の方法は極めて実際的にして、善良なる士民の養成を主眼とし、彼等少年が社会に出て、各方面に活動するに当たり、最も切要なる徳性の修養に注意する所あり、現時英国に於て少年が曾て此の教育団に属したりとの経歴は特に社会に尊重せられ、会社銀行等にて新たに青年使用者を募集するに方りても成るべく少年斥候隊出身者を選定するの傾きあり、其の従順なる観念と快活なる動作とは、殊に優良なる使傭員の資格に適応す、而して此の教育団の要訓中、最も吾人が推服して措かず我が邦少年の取って以て亀鑑と為すべしと信ずる所の者は、自己の本分を重んずるの一義なりとす、彼らは公益を重んじ、他人の為に広く善を行うを以て人生の本分と心得、従って各自の任務に全力を傾注するを以て当然のことと信じ、其の間毫末も修飾争衒の悪風なし、此一点は人々社会に処するの大義にして、教育の要本亦実に此に存す。

本分は其純潔なる意義に於て全然私心と相容れず、本分を遂行するに方りては、元より栄誉名聞の念を一掃すべきは勿論、自己の利益を犠牲と為すの感念すら己に之と両立せず、心常に公明正大にして、公義公益の外、衷心一点の曇りなく、従って本分は多く秘密の裡に行われ、他人の視聴に触れることなくして、最も克く其の本色を発揚する者なり、昔時ポムペー市が火山の噴灰に埋没せらるるや、市民多く逃走して生命を全うせる中に一人の哨兵あり、毅然として其場を去らず、灰石の下に埋もれて克く其の任務を遂行したる当時の光景は、今人之をネープルの博物館に於いて実見し得べし、兵士は素より勇敢なるべく、卑怯の挙動ある可からず、然れども勇敢は易く本分は難し、一隊一団となりて奮闘するは外間の耳目を聳動し、名聞求達の念自から其の間に生じ易しと雖も、一兵卒が弧身深く敵地に入りて偵察の任を遂げ、又は堡柵の外に立ちて哨兵の事に従うは、何等外間との接触なく、自己の高潔なる信念の外、他に頼るべきなし、是に於いて乎天真爛漫、始めて人生最善の資性を発揮することを得べし、中将バーデン、パウエル氏が斥候の方法を少年修養の上に利用し、善良なる士民を養成せんとの意実に此の辺に外ならず、我が邦教育の要義亦固り此に存し、明暗を以て行いを一にする如きは、最も其の本旨に戻背する所以なり、然るに教育の風潮動もすれば華美争衒に傾き、質実純誠の効に乏しきは、吾人の常に遺憾とする所、偶英国少年斥候隊創立者の来朝するに際し、聊か其の美風を称揚し、以て我が教育者の一考に資すること爾り。

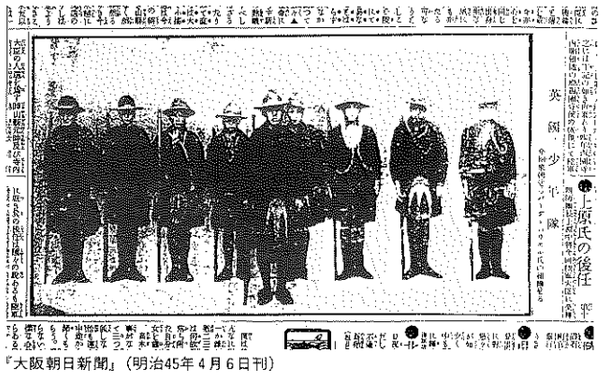
〔『大阪朝日新聞』明治四十五年四月六日刊〕

"THE JAPAN GAZETTE"（April 2nd 1912）。

『大阪朝日新聞』（明治45年4月6日刊）

この記事はまずB-Pならびにボーイスカウトを紹介し、次にボンペイでの兵士を例にして本分を尽くすことを誉めています。そして最後に日本の教育に対して述べています。文中で四月三日のB-Pの横浜での講演の一部も引用されていることも注目されます。

また前回紹介した『時事新報』の社説と同じ日に掲載されていることも面白いところです。すなわち東西相呼応して大新聞の社説としてボーイスカウトが取り上げられているのです。これを読んだ人は何万人いたのでしょうか。



『大阪朝日新聞』（明治45年4月6日刊）

B-P、京都を歩く

B-Pの日記では六日は朝食を都ホテルでとり、その後知恩院、二条離宮（現在の二条城）を見学し、七日に市内散歩をしたことしか分かりませんでした。

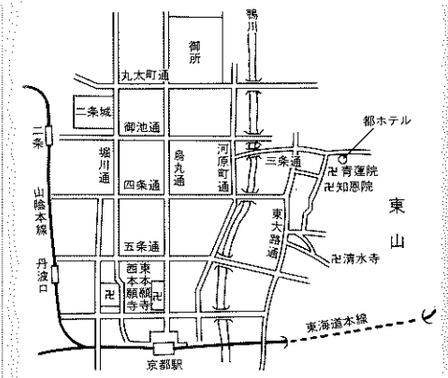
ところが、当時の新聞を見てみると、京都での行動について次のようなことが分かってくるのです。

◎パウエル中将

南阿戦争の驍将にして今は英国少年義勇隊を組織しつつある英国陸軍中将サー、バーデンパウエル氏は六日朝七時七分幕僚を随え京都駅に着。軽車にて洛東都ホテルに入り折柄の春雨を冒して粟田青蓮院より知恩院に出で清水寺の春色を探り帰途山中貿易店に立寄り陳列品を一覧し午後一時より御所に至りて宜秋門より入り宮内官に出迎はれて各殿を拝観し其の高尚閑雅なる庭園の景色を打喜び聖上陛下の旧御殿を拝承しては恭しく敬意を表し二条離宮をも拝観して帰館し晩餐の後都踊りを観て其の艶麗なるに驚き七日は都合によれば保津の急湍を下り午後四時四十八分京都発下神同夜乗船マニラに向かうべし。中将は年齢五十有五にて白髪しんしんたる温顔の長者なり今回は各地に於ける少年隊の状況を視察するが目的にてわが国を経てマニラ豪州に二カ月を送り次いでニュージーランドより南米を巡視すべしといえるが今や少年隊は百萬の多きに達し英国二十萬、米国四十萬人を有し其の他和蘭（オランダ）、デンマーク、ノールウエー、ドイツ、フランス、ロシア等も其の趣旨を賛して少年隊を組織せる由此の少年隊に常には登山、消防、料理、看護、漁労、乗馬等を練習せしめ義勇奉公の精神を涵養し平和なる国民を作るにありて親友に対して親切丁寧なるべき事、節倹、潔白、義務の精神、名誉を重んずる事等を以て規約の重なるものとなせりと云う。

（文中の句点は編集部で付けました。）

〔『大阪朝日新聞』明治四十五年四月七日刊〕



六日、B-Pは京都駅に着き、東山の「都ホテル」で朝食をとり、近くの青蓮院、知恩院そして清水寺を見学、おみやげ屋を見て京都御所を拝観し、続いて二条城というように修学旅行コースを歩いたようです。

また七日はどういうわけか保津川下りをやめて午前中は象嵌製造を、午後は西本願寺を見学し、京都を発って神戸に向かっています。

ここで注目されるのは六日、清水寺に立ち寄っていることがわかったことです。一九九二年二月号『スカウティング』誌の「一枚のスケッチ」という記事の中で「おびんづる様」の所在について触れられていましたが、これは

◎パウエル中将

洛東都ホテルに滞在中の少年義勇隊組織者サー、バーデン、パウエル中将は七日朝十時幕僚を随へ駒井貿易店に赴き象嵌（ぞうがん）の製造を観其附近に散在せる貿易店をも巡覧し午後二時より西本願寺に至り各殿を見て其の古雅なるを賞し同日午後四時四十八分京都発列車にて下神同夜出帆の独逸郵船ルーソン号にて麻尼拉（マニラ）に向け出発せり。

（『大阪朝日新聞』明治四十五年四月八日刊）

「B-Pがおびんづる様を見たのは知恩院ではなく、清水寺だ」という説を力づけるものとなります。また、七日に西本願寺に立ち寄っていることも注目されます。

記事が告げたボーイスカウト

こうして日本で発行されている新聞各紙を見ていくと、今まで日本のボーイスカウト運動史の中であまり注目されていなかったB-Pの来日は、日本の中でボーイスカウト運動を広く大衆にアピールしたという点で、たいへん重要な意味のある出来事であったということができるでしょう。

日本のボーイスカウト運動はこれ以降、東京、大阪、京都、静岡など各地で「少年団」などとして発足していきます。その中にはこれらの新聞記事を見て研究され、始まったものもあったのではないでしょうか。

全国の読者のみなさん、もしお近くにこうしたB-Pの足跡がありましたら、ぜひ研究し『スカウティング』誌上に発表してください。期待しております。

第21回 全国ボーイスカウト 写真コンテスト 作品募集

きみのまわりのシャッターチャンスを すかさずフィルムに焼きつけよう。

応募のきまりを守って、
どんどん作品を送ってください。

（応募のきまり）

■テーマ／・「ボーイスカウト」をテーマに、どんな内容でも応募できます。
・スカウトはどんなテーマでも応募できます。

■部　門／・少年の部　20歳未満の方ならどなたでも応募できます。
・成人の部　20歳以上の方ならどなたでも応募できます。

■応募方法／・テーマにそって、自由な写真をとってください。
・写真のうらに応募用紙をはって送ってください。

■作品のサイズ／カラー、モノクロとも、サービス判以上四つ切り以下
・パノラマサイズも可

■送り先・お問い合わせ／〒181 東京都三鷹市大沢4-11-10
㈶ボーイスカウト日本連盟「写真コンテスト」係
☎0422—31—5161（大代表）

■しめきり／平成6年2月28日（当日消印有効）

■審査委員／秋山庄太郎氏（写真家）およびボーイスカウト日本連盟審査委員

■発　表／
月刊「スカウト」、「スカウティング」および「日本カメラ」誌上
ただし、入選者には直接通知します。

■応募上の注意／
応募作品は平成5年1月以降に撮影したコンテスト・印刷物などに未発表のもので、他に発表または使用予定のないものに限ります。
・原則として、応募作品はお返しいたしません。
・入賞作品は、ネガ(ポジ)フィルムの提出をお願いします。
・入賞作品の使用権は主催者に属します。
・応募作品は、入賞発表のほかに日本連盟機関誌に掲載することがあります。

少年の部 最優秀賞
SONY
特定小電力トランシーバー
「ICB-U700 U-CEIVER」（2台）

成人の部 最優秀賞
エコテント（フライシート付・4〜5人用）

（賞）

少年の部最優秀賞1点
賞状／副賞／富士フイルム賞／ボーイスカウト賞（盾）
優秀賞2点
賞状／副賞／富士フイルム賞
成人の部最優秀賞1点
賞状／副賞／富士フイルム賞／日本カメラ賞（盾）
優秀賞2点
賞状／副賞／富士フイルム賞
少年・成人の部入選若干数
賞状／副賞／富士フイルム賞

第21回 全国ボーイスカウト写真コンテスト応募用紙

表題			部門 少年・成人
		（　枚組）	
氏名（ふりがな）	年齢　歳	性別　男・女	職業（学年）
住所　〒			
	電話番号　—　—		
この作品について一言			
ボーイスカウトの方は 加盟員ナンバー	所属　第　団　隊		役務

応募用紙

点線で切りとって写真のうらにはってください。

応募用紙はコピーして使えます。

主催　財団法人ボーイスカウト日本連盟
協賛　富士写真フイルム株式会社
　　株式会社日本カメラ社
　　ソニー株式会社
審査　秋山庄太郎氏（写真家）

新・微粒色
FUJICOLOR SUPER G400